

7月17日 幽霊に足がない理由

高校時代から民話や昔話に興味があったので、大学で民俗学の講義を選択することにした。見るからに元気のない、青白いひよろつとした先生だった。「民俗学には『ハレとケ』という考え方があります。ハレとは非日常を指し、ケとは日常のことを指します。結婚式のようなめでたい日を『晴れの日』というのはそのためです。そして、ケすなわち、日常が枯れることをケガレといいます」

私は言葉の謎解きをしてもらっているみたいで、わくわくしながら聞き入っていた。

「ケガレると元に戻すための儀式が必要です。それがハレの儀式です。人間にとっては生きている今が『ケ』の状態ですから、生まれる前と死後の世界は理解の範疇を超えた『ケガレ』の世界です。だから、子が生まれたとき、人が亡くなったときに儀式を行いました。生まれた子を産湯に入れ、白い産着を着せるのはケガレを払う儀式の名残。お葬式は今でも儀式として行っていますよね」

青白い顔で先生は続けていった。「幽霊に足がないのはなぜかわかりますか」

先生の無表情とその唐突さに私たちは呆気にとられ、聞き入っていた。

「着物の合わせを逆にしたり、出棺の時に茶碗を割ったりするのは、迷わずに成仏してほしいという願いからです。ある地方には、死者が成仏できずにこの世に戻ってくることを恐れて、足の骨を折って棺に入れるという習慣があります。幽霊に足がないのはそのためです」

もちろん諸説があり、民俗学的に立証されているのかどうかは定かではないが、先生の話は私にとって合点のいくものばかりだった。

